北海道研修旅行について

農業学校の歴史にただ一回の北海道援農

北の大地で貴重な体験

昭和十八年から学徒出陣がはじまり、また、労働力を確保するために勤労動員として学生、生徒が工場などで働くようになった。『北九州市史』には「小倉園芸学校は、築城航空隊、曽根飛行場、芦屋飛行場、太刀洗飛行場に出動した」とある。

こうした世情で特筆すべきは、農学校としてただ一回、本校生徒たちがはるばる北海道に出かけ援農の勤労奉仕をしたことである。

生徒たちは昭和十八年七月十日、小倉駅から汽車に乗り、五日かけて北海道へ渡った。当時の写真によると三十六期の約四十名の生徒がこれに参加している。途中の東京・上野駅では背のうを枕に野宿をしている。

行った先は、当時の北海道浦河郡荻伏村である。日高山地の裾野にある同村はちょうど米、ジャガイモ、燕麦、小豆、ソラマメなどの収穫時期にあたり、生徒たちは約二ヵ月の予定で農家に分散して手伝った。農家の働き手が兵隊にとられ、その加勢にいったのだ。機械はなく鎌で刈り取る農作業は厳しいものだったが、生徒たちには初めての土地で見るもの聞くものが勉強で、楽しかったという思い出を残したようだ。そんなエピソードのいくつかを紹介しよう。

農家のなかには競馬の馬を飼育する牧場もあった。そこでは裸馬のタテガミをつかんで走ったりした。ある生徒はかけ足で土橋を渡っていると馬が橋の穴に片足をつっこんで、数メートル吹っ飛ばされた。牧場の人から「お前はどうなってもいいが、馬の足が折れたらどうするんだ」と叱られた。幸いその馬は種馬で無事だったという。

浦河では年に二回、馬のせり市があり、上等の馬だと千円はしたとか。当時の家一軒に相当する価格だ。ちなみに小倉―札幌間が急行券を含めて二十四円五十銭で、これは全額北海道庁が出し、見舞金ももらったそうである。

また、荷馬車に乗って四キロぐらい離れた宿舎に帰る途中、暗闇のなかで手綱を誤り、川の中に馬車ごと突っ込んでしまい、馬には怪我もなかったが、荷車をかかえ上げるのが大変だったとか。

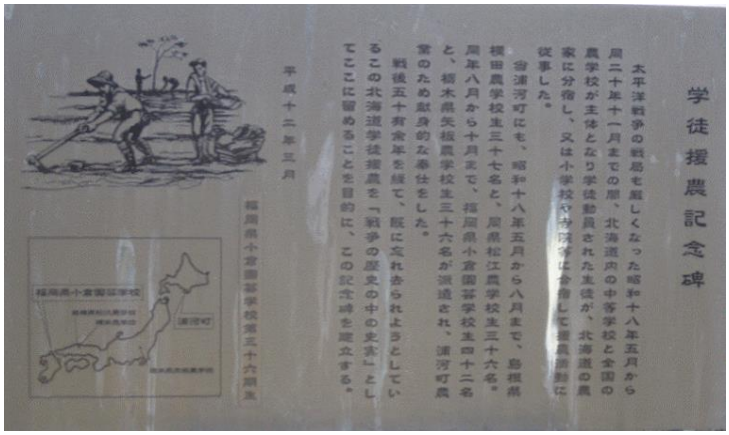
生徒二名が発熱して、チフスの疑いがかけられたこともあった。苫小牧の病院に血液検査を依頼し、パラチフス菌が発見されて荻伏村に一軒ある病院に隔離されてしまった。そこはクマが出そうな山の中で、医師が毎日注射をうちにきたという。「道庁から依頼されたアイヌのおばちゃんが、病院から二百メートル離れたところまできて、食べ物や牛乳を置いて、ヒモにつけた鈴を鳴らして知らせてくれるんです」。結局、三週間入院して一ヵ月遅れで小倉に帰ってきた。「あとで考えると、農作業より病院生活のほうがきつかった。草ボウボウの設備のない病院ですから」と回顧する。

病気の原因は近くのサケが上るという川の水を飲んだこと、夏でもふとんをかぶるその土地の習慣を無視したためということだった。

いずれにしても北海道への援農は、生徒たちには生涯忘れられない体験になっただろう。

福岡県立小倉南高等学校創立百周年記念誌「南薫百年」より

本校敷地内に設置された北海道学徒援農記念碑



北海道浦河町赤心社記念館前に設置された学徒援農記念碑

本校前身の「小倉園芸学校」時代、当時の生徒が北海道学徒援農を行っています。その縁で、北海道浦河町と交流を行っています。感染症拡大防止のための制限が緩和されたこともあり、今年度より再開することになりました。今年度は 12 名の本校生徒が北海道浦河郡浦河町を訪問いたします。